

広い空間であった。

彼はその空間のちょうど中央に佇んでいた。仰ぎ見ても、あるのは灰色で塗り固められたコンクリートの天井であった。

大きく深呼吸をした。心を落ち着かせるためであった。

「全てが揃った」

消え入るような声で呟いた。

いよいよ明日であった。明日には星辰が正しくなるのである。

足音が響いた。彼はゆっくりとした動作で振り返った。

「何だ、あなたですか」

「もう、そろそろですか」

「ええ、一時はどうなるものかと思いましたがね」

「直前になって、全てが揃うとはこれも聖王陛下と主の思し召しでしょうね」

そして、お互い黙り込んでしまふ。常人にとっては異様な空間であるが、彼らにとっては静謐な空間であるようにも感ぜられた。

「私は少しの間外に出ます。後は、あなたが独りでやって欲しい」

「随分と急なことですね」

「鼠共がうろついていましてね。その駆除をしなければならぬのですよ」

ぎりぎりとお歯を噛みしめた。ここまでやって来たのである。もう邪魔されてたまらぬのか。

「わかりました。お願いしますよ」

そう言って、男は去った。

男は諸手を天に——分厚い天井に覆われているが——向けた。

「お待ちください。統べる者よ」

九

「監視されている?……」

はやては啞然たる面持ちを以て呻くように言い返した。その一言にクロノもエイミイも猜疑を込めた視線をホロディスプレイに集中させる。ホロディスプレイには、「音声通信」を示す無機質な文字が流れていた。

『ええ、間違いありません』

「何人くらいですか?」

クロノが会話に割り込む。

『最低、二人二組の四人を確認しています。それぞれ東と北の方角から。車にいます』
「四人か……」

クロノは険しい顔を人に見せないように俯き加減で言った。

おそらく、ロッドが言った以外にも監視要員がいるはずだ。一体、何人いるのだろうか? 皆目検討がつかない。

「とにかく、ありがとうございます」

クロノは一方的に告げるようにして、通信を終了した。長い会話は危険である。暗号化されているとは言え、盗聴されているだろう。

異常なサーチャーは検知されていない。腐っても、ここは管理局が管理する官舎であり、魔力防壁を張られている。

クロノはさっとブラインドが下されたる窓に目を遣った。ここの部屋も監視されている可能性が充分にある。手近なビルの屋上から、あるいは隣の部屋で警務隊員が注意深い視線をこの部屋に注いでるに違いない。結局は彼らは古典的な方式で監視に精を出しているはずだ。

室内は言いよのない、不気味なまでの沈黙に包まれたるに、エイミイもはやても不安と懷疑が入り混じった面持ちであった。

扉が弱々しい音を立てて開いた。フェイトが険しい表情で戻ってきた。

「大丈夫だったか」

クロノが訊くと、フェイトは頭を縦に振った。

「そんなのはなかったと思う」

フェイトが答えた。彼女はベッドに腰を下ろし、大きな溜息をついた。

クロノは時計に目を遣った。

これからどうすべきか。状況をゆつくりと整理しなければならない。

まずロッド宅が監視されているのは概ね間違いがないだろう。では、この部屋はどうだろうか。

そもそも、警務隊はメゲレの行方を追っているのかという疑問が首をもたげる。考えてみると、警務隊は正規の権利を行使できるのである。役所にヤン・メゲレの転居先を訊くのは造作もないことだ。

では、警務隊はヤン・メゲレの行方がわからなかったのか。そんなはずはない。

彼は一体何から逃げ出していたのか。警務隊か？ 警務隊に拘束されて逃げ出したというのか。しかし、警務隊が一般市民を拘束するものか。

彼らは内部からの評判は悪い。時折強引な捜査——現にクロノ達が関わっているのもこれに該当する——を行なっているとも聞く。ただ、その捜査権限が及ぶのは所詮管理局内であつて、一般市民にまで及ぶものでもない。

「警務隊が一般市民を拘束するものか……」

ふと疑問が口に出た。

警務隊が一般市民に対して手を加えるのだろうか。流石の彼らでもそこまではしないだろうという否定の気持ちと、彼らならやりかねないという肯定の気持ちとがせめぎ合う。

一般市民にまで捜査をするのは違法である。彼らがそこまでやるのか。今の警務隊で、

今回の捜査を指揮しているのは、カミンスキー一尉であろう。

彼も管理局の人間だ。明らかに違法な手段をやるような男には見えなかった。あくまでも、条文を最大限都合の良いように解釈したうえで、違法すれすれに捜査を行なっていくことを得意とした人間だ。

「考えにくいよね——あ、そうか」

フェイトは閃いたような素振りを見せつるに、ホロディスプレイを立ち上げた。

「何を？」

「家出人の検索だよ」

ヤン・メゲレがこの世界で行方不明になっており、家族が搜索願を自治警に届けていれば、データベースに登録されているはずだ。

コンソールを叩き、要求をデータベースに送る。

検索中という広告とともに進捗率が表示された。プログレスバーが右へ右へと伸びていく。そして、結果を示すディスプレイが表示された。

そして、全員絶句した。

「該当一件、ヤン・メゲレ……」

気まぐれに検索したというのが、実態であるが、本当に行方不明になっていたとは、想像だにさえしていない。

フェイトは恐る恐る詳細を表示する。

「届出人、ベルタ・ブランド……」

——ベルタ。どこかで見覚えがある名前であった。すぐに、フェイトはヤン・メゲレの娘の名をベルタ・メゲレであったことを思い出した。

そして、フェイトは再び言葉を一瞬失った。

「届出日、九月一日？」

一ヶ月以上も前に行方不明になっている。今回の事件が明るみになったのは一週間前だ。すなわち、ヤン・メゲレが失踪していたことと、警務隊が追いかけていることは関係は薄そうに見えた。

「じゃあ、メゲレは一体誰から逃げていたの？……」

フェイトが独語するように漏らすも、誰もその疑問に答えられなかった。

ヤン・メゲレはむすっとした表情で、ソファに腰を沈めている。

ヴィータも心なしか戸惑いがちな面持ちだ。彼女は時計とメゲレに交互に視線を遣りながら、早くフェイトが来ないものかと考えていた。

このマンスリー・クローンに関わっていたとされる重要人物だ。情報を引き出せば、な

のは救助のための大きな進展となるだろう。

しかし、ヴィータは聴取といった行為は不得手だ。どうしても常に乱暴な口調になってしまう。相手や場面によって口調を使い分けることが不得手なのである。管理局に入局し、研修時に事情聴取の研修も受けさせられた。案の定、教官から「君は捜査官には向いていないね」と軽く言われた。

その言葉に別段衝撃を覚えてはいない。もともと、自分はそういった分野に向いておらず、武装局員が向いているということにはわかっていた。

だが、こうして重要参考人と向き合い、自分は執務官補の到着を持つだけとなると、事情聴取の研修をもっと真面目に受けていればと後悔した。今のヴィータにとっては、早くフェイトが来ることを待つだけである。

自分が何か役に立てないか。ヴィータとしては、彼女なりにメゲレから情報を引き出したという気持ちであった。相手の気を解すためにも何か会話はできないか。

「なあ、じいさん、もう落ち着いたか」

「ああ、大分な」

と彼は言った。そこでは会話は途切れる。ヴィータは少し捻って、

「家族に連絡は必要か」

と訊くと、メゲレは険しい顔となり据わった目で睨めつけるだけだ。

「いないのか？」

彼女は恐る恐るといった調子で訊く。

「娘夫婦がいるが、連絡は今止してくれ」

「何だ、喧嘩でもしたのか」

「……そういったわけじゃない。とにかく止してくれないか」

と消え入るような声で言う。再び会話ははたと途切れた。

どうやら向こうに会話する気はさらさらなようだ。もともと、内向的で人と関わりたくない氣質が強いのもかもしれない。

ヴィータは軽く溜息をついた。大人しくフェイトの到着を待つしかない。

彼女は時計を見遣った。

既に夜の十一時を廻ろうとしている。いつになったら、フェイトは来るのだろうか。ロッド宅に着いて連絡を入れてから三十分は経過している。この聖王教会の管理している住宅街と局員の官舎はそう遠くはない。ゆっくり歩いても二十分の距離だ。

少し遅いではないのかと、ヴィータは不審の色を浮かべた。

居間に行くと、ロッドが険しい表情で椅子に座っており、ヴィータの顔に浮かんでいる不審の色がますます強くなった。

「ああ、ヴィータさん、外に出ないでください」

「どうしてだ？」

ロッドは窓の外に視線を遣つてから、声を押し殺しながら、

「監視されています」

ヴィータは息を呑み、顔つきが瞬く間に強張つた。尾行に充分注意していたつもりである。

「本当か？」

「ええ、間違いありません」

「どこにいる？」

「右手の交叉点に一台、左奥の交叉点に一台います」

ロッドはカーテンで覆われた窓に目を向けながら言った。ヴィータが恐る恐るそこに近付いて、カーテンの隙間から外を窺うに、

「確かに、車が停まっているな」

この時間、住宅街で車を停めているのはあからさまに怪しい。だからといって監視しているとは言いすぎないようにも思われた。

「確証は？」

「まあ、勘ですよ」

「勘ねえ……」

ヴィータは半ば信じていない素振りを見せる。

「これでも、長年管理局で捜査官をやっていた。見えるものが違うんです」

自信満々に答えた。もともと彼とて勘だけで言っているわけではない。乗車している人間達の素振り、漏れ出た小型端末の光。諸々の要素から、これは監視せられていると結論付けたのである。

ヴィータも彼の溢れる自信から、ひとまずロッドの主張を信ずることにした。

「もう、はやてには連絡したのか？」

ロッドは無言で首を縦に振る。ようやく、フェイトが来ない理由が理解された。

「ヴィータさん」

「何ですか？」

ロッドが声を落として訊いてきた。

「本当にメゲレさんは、今回の事件——はやてさんと私が担当している事件の参考人なんでしょうかね」

ヴィータは努めて無表情を装い無言を貫いた。彼は構うことなく、

「あの監視はどこでしょうかね。雰囲気から察するに、局のようにも思えますがね。そう、例えば、警務の連中でしょうか」

そこでロッドは言葉を切った。ロッドははやてから、今回の事件の参考人であるとしか

聞かされていない。わざわざここまで連れて来られたうえ、聴取に来る人物も全く知らぬ人物である。

もともと、明らかに不自然な行動なのだ。そのうえ、監視までされる。その時点でいくら鈍い人間でさえ奇妙に思わなければならない。

「どうなんです?」

とロッドはやや険しい調子で問い詰めた。ヴィータは逡巡する素振りを見せるに、重々しく言葉を紡いだ。

「い、今は言えない」

「今は?」

ヴィータはロッドに向き直り、

「——今は死んでもばらせない」

と決心したように言い切った。彼女の言葉を聞いて、ロッドはにわかに破顔した。突然の破顔にヴィータは困惑の色を浮かべたのであった。

「うん、そうですね。ここではばらすようでは局員失格です」

意外たる反応に、ヴィータは微笑を思わずして浮かべた。初めて会ったときは、やさぐれた人間に見えたが、怖ろしいまでの洞察力を備えているようだ。

「事情は掴めたは言いすぎですが、大事な案件を抱えているということは理解しましたよ」

「済まない」

「お気になさらずに」

さて、監視されているということを確認したるもどう動くべきか。おそらくクロノ達も大きな行動に出られないし、ここにいる自分達も迂闊に動けないのである。

しかれども、一向に座して持つ、という訳にもいかない。監視員はどう行動してくるのか。

ヴィータにはわからなかった。彼女は監視——もう少し柔らかに表現すると張り込みだろうか——を経験したことはない。

彼女は助けを求めるような目をロッドに向けた。

「多分、このまま監視は続くでしょう。そして、連中がメゲレさんがどこまで重要視しているのかで変わりますが、最悪の場合実力行使に出るでしょうな」

「それじゃあ、排除するのは」

言ってから、明らかに駄目な意見であることに気がついた。

「こちらから、実力に出るのなら、相手に大規模な実力行使に出る口実を与えますよ」

ヴィータはうな垂れた。ロッドは目を細めながら、警戒の視線を窓に投げかける。

「下手に動くわけにいきません」

「どうするんだ？」

「そうですね……。こちらからも少し探りを入れてみましょうか」
そう言うロッドの目はかつての捜査官時代のものとなっていた。

「大丈夫ですかね」

「何がだ」

若い局員が、助手席に座っている先輩格の局員であるルドルフに聞いた。エンジンを掛けていない車内は寒かった。晩秋の冷気がひしひしと車内を侵食したるに、若い局員は体を震わせた。

「カイクスの本部に連絡入れていないんですよね。それに自治警にも連絡を入れていないし、大丈夫なんですか」

彼は不安で顔を曇らせながた訊いた。

「別に連絡を入れる必要はない。完全マル秘なんだ。たとえば、地上本部だとしても連絡を入れるわけにいかない」

管轄云々で考えると、ここは当然カイクスの地上本部の管轄下である。地上に本局の局員がいること事態は別に珍しくないが、そういった場合は事前に一報を入れる必要がある。何かごたごたが起きたときに、地元の管理局本部が即座に対応できるようにするためだ。